

おおさか

KEYワード

第
64
回心
の
な
か
の
大
阪
を
探
せ

「アニマル柄好きは、実は東京

正月をどう過ごすか立ち寄ったCD店で、往年の爆笑王、中田ダイマル・ラケットの「ベスト漫才集」を入手した。名プロデューサー澤田隆治さわだ たかはるさんが選んだ全10席を取め、「青火がパァ、ボヤがボォ」の「僕は幽霊」やら「地球は回る目は回る」など、聞けば聞くほど、なつかしい…。

ダイラケ師匠といえば、昭和53(1978)年の秋、私は東京の大学にいて、心齋橋パルコの「これが漫才だ!中田ダイマル・ラケット爆笑三夜」に行けずに残念だったことや、もっと昔、小学生のころ土日の午後は、道頓堀・角座や花月の寄席の中継や松竹と吉本の新喜劇をブラウン管の前で見て過ごした日々の生活の記憶もよみがえってきた。

ブラジル音楽やポルトガル歌謡のファドで用いられる“サウダージ”(Saudade;サウダーデとも)という言葉が浮かんでくる。単なるノスタルジーでない。憧憬、思慕、切なさも含み、両親に見守られ、無邪気に楽しい日々を過ごした過去への懐かしさや、かなわぬ憧れも含む言葉である。ボサノヴァの神、ジョアン・ジルベルトの名曲「想いあふれて」の原題も“Chega de Saudade”(シェガ・ヂ・サウダーヂ)だ。

道頓堀の近くで生まれ育った私の場合、大阪への愛情の根底にあるのは、少年時代に見た演芸や喜劇などの番組に感じる“サウダージ”であるらしい。他方、大阪を語りながらも郷土への愛情をあまり感じさせないテレビ番組など、制作側に“サウダージ”が乏しいと思えてきた。

例えば、大阪を語る上で、さも当然のように登場する「ヒョウ柄のおばちゃん」である。博報堂が2005年に、東京と大阪の主要ターミナルで約10万人を調査したところ、アニマルファッションの着用率は、東京4.3、大阪3.5%で東京の方が高かった。マスコミが喜ぶお笑いネタである「大阪はヒョウ柄などアニマル率が高い」は、旭堂南陵あきどうなんりょうさんも批判しておられ(『事典にない大阪弁—絶滅危惧種の大坂ことば』浪速社、2014年)、都市伝説に近い俗説であり、進んでそれを吹聴するのは、大阪への愛情とプライドが希薄な気がする。

さらに、難波生まれの詩人小野十三郎(1903-1996)は、昭和42(1967)年の段階で、当時ドラマで「大阪らしさ」として大流行していた「がめつい」「ど根性」という言葉を本来の大阪ではなく、「大阪を見る地方人の感傷」と断じていた。

「わが大阪庶民にも、風俗、風習、趣味、その他万端にわたって、だれかの口車にのっているとは気がつかず、大阪ふうや大阪的であることを、みずからの必要以上に自慢したがる傾向がある」



戎橋の上にいる3歳の著者。昭和35(1960)年4月、私の記憶にある最も古い道頓堀



この日は天王寺の動物園にも行った。背後には通天閣。

と、小野はつづけて鋭く批判するのである(『大阪—昨日・今日・明日—』角川新書)。

そして、大阪文化を、「船場型文化—伝統的大阪らしさ」「河内型文化—土着的庶民文化」「宝塚型文化—都市的華麗」に分類した「上方芸能」初代編集長の木津川計さんは、現代の大阪人は、自ら進んで誇るべき文化的伝統を壊し、大阪の都市のグレードを下げていると警鐘を鳴らす(『含羞都市へ』のじぎく文庫、1986年)。

人間それぞれ、時代や育った場所への思い、“サウダージ”があるだろう。世代の違いや新しく市内に入った人たちには、大阪の伝統文化を学ぶ機会が乏しく、電波で広められた「こてこて」で「厚かましく」「下品」な姿こそ、大阪らしいと信じざるを得ない事情もあったかもしれない。しかし、大阪人が自虐的に大阪を茶化す傾向が根強いのは、小野の指摘のように、大阪人のサービス精神が、悪い意味で誰かの口車にのせられ全開している気もする。

往年のしゃべくり漫才や、たこ焼きひと舟十個八円の記憶に“サウダージ”を呼び覚まされる私は、人相の変った旧友に驚くがごとく、街の変貌にとまどい、滅亡直前の茶けた地球を眺める宇宙戦艦の艦長のように「大阪か…何もかも皆なつかしい」と、よろよろ、つぶやくばかり。「いや、そんなあほな」と元気に答える若い人たちも30年後は同じ心境になるかも。ドナイな新年を迎えますやろか。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合芸術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念 佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス／モダン都市の幻像—」(創元社)など。